

極小書店の心意気 — 沖縄とインド —

世の中はどんどんと大規模化するばかりだ。小売店が町から姿を消し、大規模なスーパーマーケットが席卷する。かと思えば、そのスーパーマーケットも、グローバルに展開するネット通販にバタバタとなぎ倒されてゆく。“寄らば大樹の影”、“長いものには巻かれろ”でもあり、スケールメリットに意味があり、それはそれでよい側面があることも確かだが、一方で、それがもたらす弊害も大きい。

91

第一、大規模なことは、それが平板で平準化されたものでもあることである。それは、規格化されているということでもあり、円滑な社会活動に必要でもあるが、一方で、面白みに欠ける。社会が平板になり平準化が進むと、逆に多様性や個性が欲しくなってくるともいえる。

それは、本の世界も同じである。

大規模書店やネット書店だけになってしまったらこの世はずいぶん面白くなるだろう。

人のあるところに本屋あり。人は耕したり、獲ったり、漁したり、つくったり、しゃべったり、食べたりする生き物であるが、読む生き物でもあるので、人が住むところには本屋がある。

とりわけ、こんなところに、というところに

本屋があるときや、こんな風に、と思っても見ない方法で本が売られている時はうれしくなるし、それは文化にとって必要なものだと思う。

沖縄市場の極小古書店

沖縄の那覇の国際市場でそんな出会いがあった。

国際通り市場というと、那覇の胃袋を支える市場であり、近年では、日本国内のみならず、中国や台湾、韓国からの観光客も引き付ける観光スポットとなっている。観光スポットであるから、お土産物屋も多い。だが、伝統ある庶民の市場でもあるので、人々の暮らしに密着したものを売る店も根強く残っている。そんな中に、一軒の古本屋があるのだ。

市場に古本屋があることはそれほど珍しいことではないが、その面白さは、それが、わずか約3メートル四方ほどの空間であること。間口が3メートルほどで奥行きも3メートルほどの小さな店が、その古本屋「ウララ書店」の店舗だ。右となりは、たしか傘屋で、左隣はお土産物屋、向いは鯉節屋だったと思う。まさに市場の真ん中にある店。店主はまだ若い女性で、もともとはジュンク堂で働いていたそうだが、ジュンク堂の沖縄店の開店の手伝いに来て、そのまま沖縄に居つき、この店を先代から居抜きで譲り受けたとか。『那覇の市場で古本屋』（宇田智子著、ボーダーイ

ング刊)という本に彼女が書いている。

店は小さいが、その小さい中に、本棚が10本以上あり、ぎっしりと本が詰まっている。小さいけれどなかなかの品ぞろえで、沖縄関係の本はもとより、思想や文学関係も充実している。稀覯本の『沖縄古語辞典』の隣に、山之口猷の詩集があり、その隣には藤井貞和の南島文学論がある。ブログでの発信を通じて、韓国や台湾のインディペンデントな書店とのネットワークも持っている。小さいけれども、あるいは小さいからこそ、しっかりとした存在感がある。

インド・ベンガルの移動式自転車書店

そんな小さな本屋には、インドでも出遭った。ベンガルにあるタゴール国際大学(ベンガル語でヴィッショ・パロティ大学と呼ばれることもある)に行ったとき、そのキャンパスで販売していたのが、「移動式自転車書店」。

タゴール国際大学は、ノーベル文学賞も受賞した詩人のタゴールが1921年に設立した大学で、全人格の陶冶を目指し、授業は樹下で行われるなど、自然と一体化した理想主義的な教育で知られる。樹下で授業が行われるくらいだから、キャンパスは、大きな木がたちならび、ちょっとした森のようになっている。大学ができる前は、この地は、荒地地だったが、森は、タゴールたち

が植林したことによりできたものだそうだ。

その移動式自転車書店は、キャンパスの一角のインドボダイジュの日陰にあらわれる。自転車は、後ろに屋台状のトロリーが取り付けられていて、その屋台のふたを開ければ、その蓋が陳列台になり、その屋台自体は平台になる(写真①)。ふたにブルーシートをかけ、それを菩提樹の枝に結び付ければ、即席の日覆いができる。手前には簡易の小さな台を広げてそこにも本を並べ、傍らにはベンチも用意する。ちょっとした読書空間の出来上がりである。

売られているのは、新聞や雑誌といった日常的な物から小説や学術書まで幅広い。タゴール国際大学は、独自の教育によって有名で外国からのゲストも多いので、その外国のゲストを当て込んだ英語版のタゴールの詩集や写真集も用意されている。

場所がキャンパスを貫く幹線道路のちょうど交差点なので、ひっきりなしに客が来る。ちょっと立ち寄って新聞を買うといった人が多いが、中にはじっくりと品定めをしていく人もいる。店をやっているのはまだ若い彼。きっと彼は、ならんでいるそれらの本を自分で仕入れて、そうやって売るのだろう。品ぞろえといい、並べ方といい、客あしらいといい、なかなかのものだ。いい面構えをしている。この分だと、彼は、もしかしたら、数年後には、大きな本屋を持っている

かもしれない。だが、案外、彼は、自分の城のようなこの小さな動く本屋を気に入っているのかもしれないとも思う。

インド・ニュー・デリーのカプセル式書店

インドでは、ほかにも、そんな小さな本屋をいくつか見た。写真は、ニュー・デリーの街角にあったもの(写真②)。直径3メートルほどの円筒形のガラス張りの建物の中には、ぎっしりと本

が詰まっていて、外に向かって背表紙が見えている。円筒なので厳密にはカプセルとは言えないのだが、とりあえず、カプセル式書店とでも言いたくなる。

この円筒形の中には客は入れないのだが、窓口から、ほしい本のタイトルを言うと、店員がそれを取って、窓口から渡してくれるという仕組みだ。

それにしても見事なディスプレイだ。窓に合わせて芸術的に本が積み上げられ、内部にもこま



写真①移動式自転車書店(インド、シャンティニケタン)

かな仕切りがあり、そこにも本が積み上げられている。

どんな本があるのかと近寄って見たらほとんどが英語の本で、しばらく眺めていると、店の親父が近づいてきて、「ラシュディ（インド系作家のサルマン・ラシュディ Salman Rushdie）の本ならほとんどあるぜ」と胸を張った。ここにもミニ書店の誇りがあるようだ。

文化の豊かさは多様性が育む。これらの本屋の営為はたしかに小さい。しかし、その小さな

営為が多様性を支えている。そして、営為の後ろには、その人たちの誇りと創意工夫がしっかりと詰まっていることもこれらの本屋の個性的な在り方は教えてくれる。

寺田匡宏



写真②カプセル式書店（インド、ニューデリー）